

終戦70年 体験を語る

⑩

敗戦時、中国や南方戦線など海外に残された軍人や民間人は約660万人。日本への集団引き揚げは14年間行われた。しかし、帰国することなく、生死もわからぬまま「戦時死亡宣告」によって戸籍から抹消された人も多い。夫の帰還を信じ、引き揚げ船が入るたびに港で待ち続けた尾崎利子さん（95、京都府宮津市・仏性寺門徒、大阪府藤井寺市在住）を訪ねた。

新生活は わずか20日間

いました。そして、新しい結婚生活でした。あ京（現在の長春市）での当時は仕方がないこと4月17日、伊津野勲さんとだと思っていました。昭和20年3月末のこんなと祝言を挙げましたが、後になってみれば、とです。結婚するため、た。しかし5月7日、夫と過ごした大切な大義父と一緒に婚約者が、夫に召集令状が届いた切な20日間でした。待つ中国・満州に向かのです。わずか20日間 戦況が悪化し、義父



尾崎利子さんと伊津野勲さんの結婚式の写真。しかし、このあとすぐ勲さんに召集令状が届き、夫婦で一緒に過ごしたのはわずか20日間だった

引き揚げ船入るたび港に 信じた夫の帰還 1枚の告知書で戸籍抹消

くの人が倒れ亡くなった。身を潜めてきました。身を潜めながら、何とか生き延び、義父たちと日本への引き揚げ船に乗れたのは昭和21年7月末でした。8月13日に博多港に着き、京都の地を踏んだのは8月20日でした。夫が先に帰還していることを信じていました。いや願っていません。でも、現実とは違いました。

夫の消息を 尋ねる日々

何の手がかりもないまま、夫の消息を尋ねて回ることに明け暮れました。京都駅に引き揚げ列車が着くと聞く、朝にたくさん弁当を作り、プラットホームに入れてもらいました。列車の窓ごとに弁当を配りながら、夫の部隊名「歩兵90連隊（満181部隊）」（通称「凧20008」）を書いた紙を見せながら消息を尋ねました。わらにもずがる思いでした。夜にしょんぼりと帰ってくる私を、家族は黙って迎えてくれる、そ

開拓団で残されたのは女性と子どもばかり。極寒と食糧難で多

んな毎日でした。私と同じような境遇の人は全国各地にいました。そして、未帰還者です。昭和26年7月、白紙発足し、私もいろんな引き揚げ運動に参加しました。友人が経営する大阪の学校に勤めながら、政府に働きかけました。しかし、

大阪府藤井寺市

尾崎 利子さん



夫の遺書や戦地からの写真、「死亡告知書」、結婚当時の写真などを前に、苦勞を振り返る尾崎利子さん

8日後、吉田茂総理からの「条約に捕虜問題を加える」という通達を受け取りました。

未帰還者の 留守家族会

これを機会に、大阪で未帰還者留守家族会を結成しました。中国やソ連から引き揚げ船が入港するという新聞記事を見ては、舞鶴港へ、時には東北までも出かけた。引き揚げ者のお世話をし、兵隊さんの顔を一人一人のぞいては、夫の消息を聞きまわりました。

しかし、夫の姿はあていなく悔しさを味わいませんでした。戦死の「死亡告知書」を受け取るべきか悩むへと動きだし、昭和33年、夫の戸籍を抹消すことと迫ってきました。突然の赤紙1枚で召集されたから13年。昭和20年8月12日、中ソを、なぜ私が判断して国境付近で消息が途絶えてしまったか。悔しくて、悲しみが不明のまま、一日千回、決心がつきませ私たちが家族。それな



めぐみ会 尾崎さんは、本願寺派関係の未帰還者の妻で組織した「めぐみ会」の副会長を務めた。同会は昭和33年、勝如上人（大谷光照師）の妹、近衛正子さまを会長に迎え、発会式には滋賀、京都、大阪の未帰還者の妻11人が本山の飛雲閣に集まった。戦没者追悼行事、共済制度の創設、大阪の津村別院で法話会を毎月開くなど積極的に活動を展開した。昭和62年には発足30周年で大谷本廟に記念碑（写真）を建立、会員は130人を超えた時もあったが平成24年に活動を休止した。

白木の箱に 頭髪と爪

戦死の公報を受け取りました。夫の戦死した日は「8月15日」と記載されていました。白木の箱に夫が出征した時に切り取った頭髪と爪を入れました。昭和45年に縁あって再婚した後も活動を続けました。そして平成18年、京都府宮津市に私と同じ境遇の女性たちが一緒に暮らせる施設「千代の会 恵の苑」を建てました。来年2月1日号から「体験を語り継ぐ」来年2月から連載

◇ 終わり ◇

「どこかで生きてはいる」と思えてなりません。今の世の中の動きは刻一刻と変化しています。若くは、若い人たちが戦争のことをどう考えているのか心配でなりません。もう二度と私たちがのような悲しい思いをする人があってほしくありませんから。来年2月1日号から「体験を語り継ぐ」来年2月から連載と継承する姿を紹介する「戦争体験を語り継ぐ」(仮題)を連載します。